



国土交通大臣賞(4件)

国土交通大臣賞 「事業所・地方公共団体等」分野	受賞者名
	東亜建設工業株式会社 横浜支店
	取組の実践場所
	山梨県上野原市、神奈川県相模原市(相模貯水池)およびその他
	受賞テーマ
	貯水池の浚渫土や建設残土を有効活用したグラウンド造成

相模貯水池は、上水道及び工業用水道の用水確保、並びに電力の供給等を目的に昭和22年に完成した相模ダムによって誕生した貯水池であるが、年月の経過とともにダムの宿命である堆砂(たいしゃ)が進行していった。このため、神奈川県では昭和35年から堆砂除去に着手し、昭和62年からは浚渫(しゅんせつ)船団を導入し、貯水機能の維持と災害防止のための対策を強化してきた。

受賞者はこの浚渫事業の受注の機会を得るなかで、堆砂対策を安定的に進める上では、浚渫土砂の処分先を継続的に確保していく必要があり、浚渫土砂を活用した造成工事を近隣で行えば、浚渫土砂の有効活用によるコスト縮減が図れ、神奈川県の事業へも貢献できるものと考え、近隣での造成工事の機会を探していた。

一方、相模貯水池近傍の上野原市に平成2年に開設した帝京科学大学では、アウトドアスポーツの活性化及び学生の競技技量の向上等を目的とした「スポーツ施設の充実」を図るため、学舎近傍に新たなグラウンドの確保を検討していた。

このような背景の下、同社では双方の課題をマッチングさせ、グラウンド造成においては、盛土材を購入することに比べ大幅なコスト削減が図られ、浚渫事業においては、安定的な浚渫土砂の受入と搬出に伴う環境負荷低減に寄与できることから、浚渫土砂を活用したグラウンド造成事業計画を帝京科学大学へ提案するとともに、神奈川県との浚渫土砂受け入れに係る協議を進めた。

そして、平成16年から浚渫土砂等を活用したグラウンド造成事業に着手し、造成に必要な盛土約77.8万 m^3 の内約78%(約61.3万 m^3)を相模貯水池の浚渫土砂を活用するとともに、その他UCR(株式会社建設資源広域利用センター)から斡旋された周辺での建設発生土約15.4万 m^3 とJR東海の山梨リニア実験線延伸工事からの建設発生土約1万 m^3 も活用して、平成28年に完成した。



なお、造成場所の谷戸にホテルの生息が確認されたため、仮設沈砂池の設置による濁水の流下抑制及び工事中の個体数調査などを実施し、地域のホテル個体群への影響を極力低減するとともに、土砂の搬入にあたっては、使用するダンプの台数を1日あたりのべ台数の制限(浚渫は99台、浚渫とUCR受入れ時は150台)を設け、地元への騒音・振動や排ガス等の環境負荷や交通渋滞などの生活への影響が短期間に集中して発生することを回避した。

又、貯水池における堆積土砂の除去とその有効活用については、今後も課題であり、今回のアイデアに留まることなく新たな活用先を見出す目的で様々な検討を行っており、海域での干潟造成への利用可能性を実証実験で探った。



相模貯水池での浚渫状況



完成したグラウンドの全景